

トンボ池等湿地環境再生検討会 及び地域からの意見について

1. 第2回トンボ池等湿地環境再生検討会 . . . 1
2. 地域からの意見 . . . 9



1. 第2回トンボ池等湿地環境再生検討会

日時：平成21年10月20日

第2回トンボ池等湿地環境再生検討会の概要

●池全体の平面図



第2回トンボ池等湿地環境再生検討会の概要

●H21 調査結果（速報）のまとめ

- 状態が悪い池は、トンボ池、中池、まこも池、古池であり、造成池は比較的良好である。
- トンボ池は、透明度が低く夏期に嫌気化する。中池は、底層が嫌気化している。
- まこも池は、ヨシに覆われ夏期でも干上がることがあり、トンボが少なく魚類は確認されていない。
- 造成池については、特に大きな課題はみられない。

項目		トンボ池	中池	まこも池	古池	造成池	ため池
水位		冬干上がり	水面あり	干上がり	水面あり	水面あり	(評価外)
水質	富栄養化 (N:総窒素、 P:総りん)	N、P、CODが 高い。 (クロロフィルa が多い)		—	N、P、CODが 高い。 (クロロフィルa が多い)		P高い
	にごり、透明 度	にごり(降雨濁 水)		(降雨濁水)			にごり (降雨濁水)
	溶存酸素 (夏期)	底層嫌気化	底層嫌気化	—	全層嫌気化		
底質	硫化物量	高い	高い		高い		—
生物	水草	水草多様	沈水少	ヨシ繁茂	沈水少	水草多様	沈水なし
	トンボ	多様		少		多様	
	魚類	多様		無し			
	外来魚	多い	少	無し	少	少	無し

凡例: 良い状態 特に問題なし 悪い状態 — 調査なし

第2回トンボ池等湿地環境再生検討会の概要

● トンボから見た場の課題

- 種によって必要とする場が異なり、さらに生活史の段階によっても必要とする場が異なるため、多様な場があるほど多様な種が生息できる。

トンボが必要とする場

卵

- ・ 生息できる水域
- ・ 孵化まで身を隠す場

幼虫（ヤゴ）期

- ・ 生息できる水域
- ・ 外敵から隠れる場
- ・ 生息できる水質

羽化期

- ・ 羽化のためにつかまる場
- ・ 羽化直後の隠れ場

成虫（未成熟）期

- ・ 成熟するために豊富な餌のある場

成虫（成熟）期

- ・ 繁殖を行う場
- ・ 産卵場

トンボから見た場の課題

卵

- ・ 干上がりによる水域の減少
- ・ 底泥の堆積による湿生植物（沈水植物）、砂礫底の減少

幼虫（ヤゴ）期

- ・ 干上がりによる水域の減少
- ・ 底泥の堆積による湿生植物（沈水植物）、砂礫底の減少
- ・ ヤゴを捕食する外来魚等の侵入
- ・ 著しい嫌気化による生息環境の悪化

羽化期

- ・ トンボ池、中池では湿生植物（抽水植物）が少ない

成虫（未成熟）期

- ・ マダケ、クズ等の繁茂による餌の豊富な草地の減少

成虫（成熟）期

- ・ トンボ池、中池では湿生植物（抽水植物）が少ない
- ・ 底泥の堆積による湿生植物（沈水植物）の減少

第2回トンボ池等湿地環境再生検討会の概要

●トンボ池周辺のゾーニング案

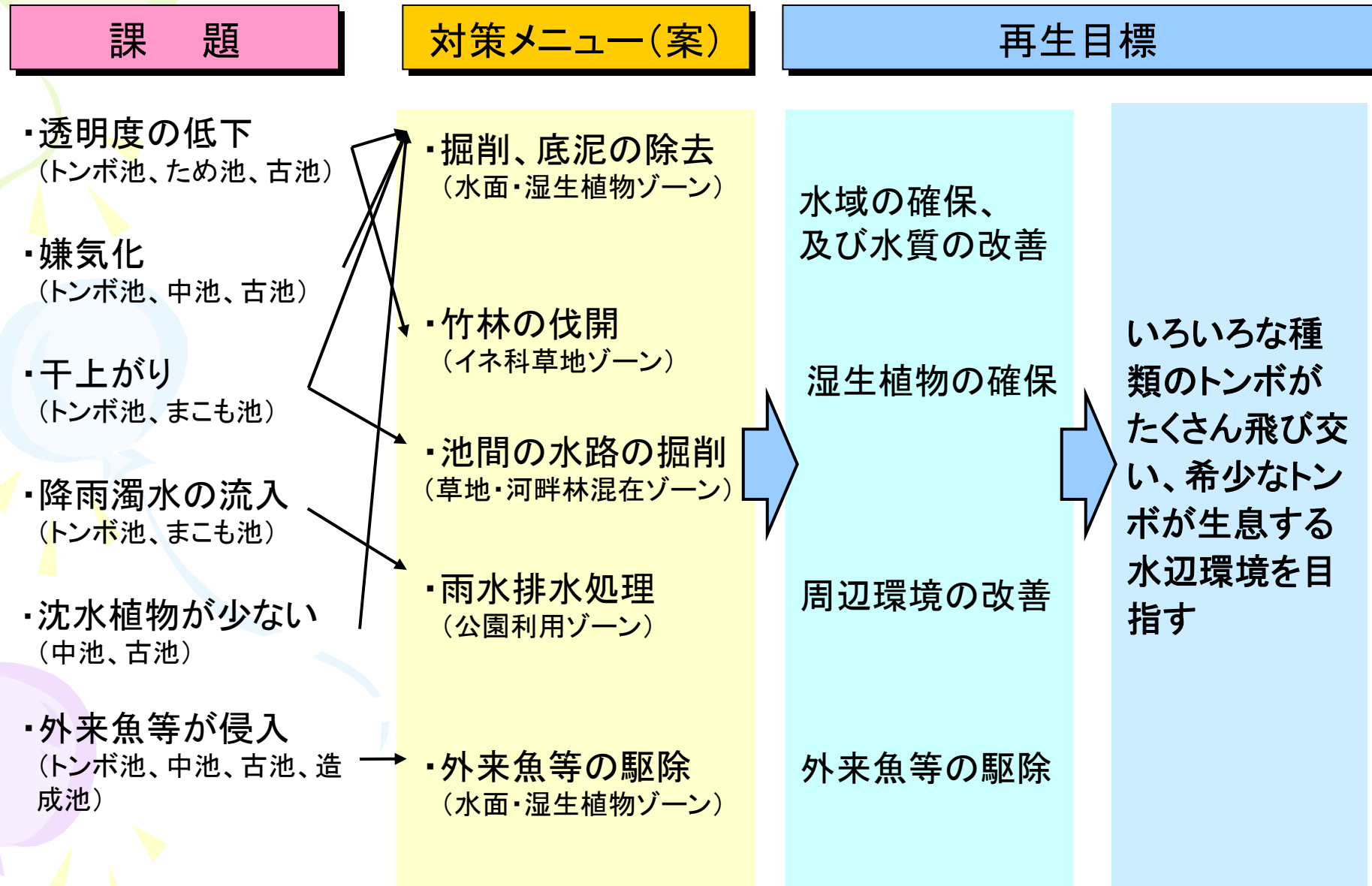
■現在の草地、湿生植物、河畔林などの多様な場を保全しつつ、自然とふれ合える公園利用を促進するため、ゾーン区分を設ける

- 水面・湿生植物ゾーン : トンボや湿生植物が生息・生育する場
- 草地・河畔林混在ゾーン : オギやアカメヤナギ等が混在する場
- 河畔林ゾーン : 里山利用タイプのトンボが利用する河畔林
- イネ科草地ゾーン : ススキやオギなどの河川敷に代表的なイネ科の草地
- 公園利用ゾーン : 自然観察やスポーツ利用などのふれあいの場



第2回トンボ池等湿地環境再生検討会の概要

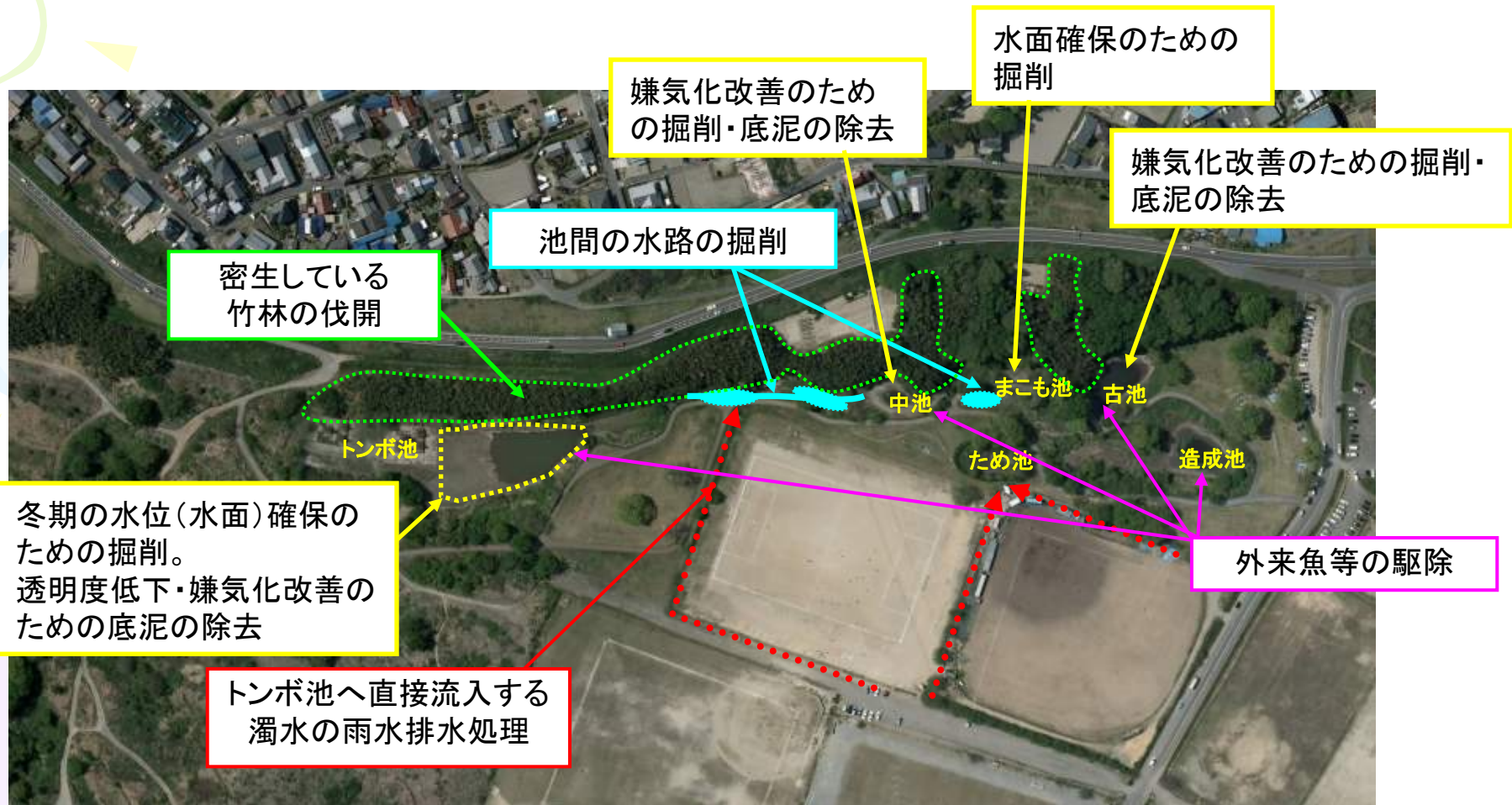
●再生目標と対策メニュー（案）



第2回トンボ池等湿地環境再生検討会の概要

●保全対策の実施内容

- 環境の悪化が著しい箇所において、竹林の伐開、掘削・底泥の除去、池間の水路の掘削、雨水排水処理、外来魚等の駆除を実施する。



●さらに検討すべき事項

◆グラウンドからの雨水排水の処理対策

◆池間の水路の掘削

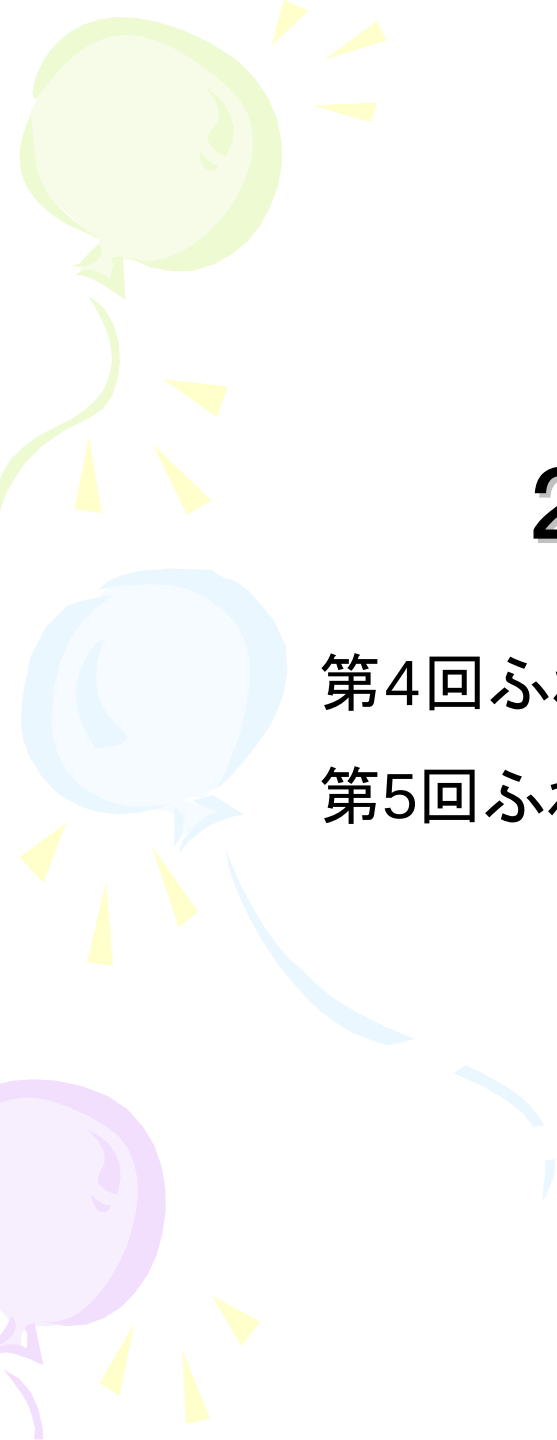
◆水位の確保

●いただいた主な意見

◆沈水植物の再生がポイントとなる。シードバンクの活用について検討すること。

◆竹林伐開後の外来植物の侵入に注意する必要がある。

◆再生対策を地域の環境学習、環境教育にもっと活かすべきである。



2. 地域からの意見

第4回ふれあいセミナー 日時：平成21年5月31日

第5回ふれあいセミナー 日時：平成21年9月5日

自然再生に対する地域住民からの主な意見

	主 な 意 見	頂いたご意見に対する考え方
自然再生計画について	自然再生計画は、いつからいつまでの計画か教えてほしい。また、やることが沢山載っているのので、行程表を付けてほしい。	自然再生計画は、今後概ね5年間を対象としています。また、自然再生計画の中では詳細な行程表は記載しません。
	自然再生計画の目標が何を言っているのか理解できない。木曽川らしい自然環境とは何なのかわからない。どのように自然環境を保全していくのか不明である。 南派川は、私の子供のころから水が流れていないので、今更、流す必要なあまり感じない。昔はホタルがたくさんいたようなので、ホタルがいるような環境にすることを目標にしてみたい。	自然再生計画の策定にあたっては、よりわかりやすい計画づくりに努めていきます。
	身近な点の自然再生計画は理解できたが、源流から一体となる取り組みも考えていただきたい。(ex:流砂系の一貫化)	ダム建設による土砂の減少等、流砂系に関わる課題は、流域全体を対象とした重要な課題であると考えています。
	現況把握や課題設定、計画・構想など大枠はよくわかりました。が、具体の計画や再生実行のことが今ひとつわかりにくいと感じました。原案説明ということで今は無理でも段階を踏んで具体の説明等を行うと”意思表示”されることで河川管理者の意欲が伝わり 理解(期待)と共感が高められると思います。	自然再生計画の策定にあたっては、よりわかりやすい計画づくりに努めていきます。
	木曽川の笠松付近では、川底の砂利がなくなり、砂地になってしまい、アユなどの魚が砂利につく藻を食べて育つ魚が育たなくなっています。魚のためには、川底の環境も目には見えませんが研究対象にしていいただきたい。	河川の自然環境に関する基礎情報の定期的、継続的、統一的な調査として「河川水辺の国勢調査」を実施しています。この調査によって、河川内の魚類や底生動物にも着目した調査を行っています。
	樹林化した河川を早急に何とかすべきと考えます。治水面から見ても不安感は否めません。	伐採の必要性について十分認識しております。優先度をつけ、伐採を進めたいと思います。

自然再生に対する地域住民からの主な意見

	主 な 意 見	頂いたご意見に対する考え方
自然再生の対策案について	河川景観や人と人とのふれあう親水空間を活かすという今後の方向性から、 南派川への導水をお願いしたい 。現在は水流が不足しており、よどんだ水となっているため最低でも流れ（サラサラ）がある状態にしてもらいたい。	南派川への流水頻度を増加させ、砂礫河原の再生と河川景観、親水性に配慮した自然再生計画の検討を進めます。
	湿地帯をつくろうということで行われた 河道掘削後に湿地帯やワンドが出来つつあり、魚や植物も増えてきていると思う 。今後、河床掘削はとにかく深く掘り下げればよいという前提だけでなく、このようなことをあちこちでつくってほしい。また、揖斐川河道掘削のワンドは残してもらった事もある。今後も地域住民を立ち合わせ意聞いて欲しい。	河道掘削等の改修にあたっては、流水を安全に流すための工事に合わせて、ワンド等の水際湿地など多様な環境が形成されるよう配慮していきます。今後も地域住民の皆様のご意見等を踏まえながら、良好な河川環境が保全・形成されるよう努めていきます。
地域活動について	木曽川の流域に目を向けた 地域交流であるとか、上下流の交流が大切 であると考えている。	河川を流域で考えることが重要と考えています。河川に関する情報を地域住民と共有するとともに、住民参加と地域連携による木曽三川を軸とした地域づくりを行っていきたいと考えています。
	ワンド等の水際湿地の再生の課題は下流域でも背割堤のケレップ水制辺りで共通しています。ただ 治水や利水の課題に比べると住民サイドの意識はたいへん低調 です。そこで例えばこういう課題に絞り込んだ検討会や講演会など、官・学・民等がひとつになって研鑽することを重ねないと理解も盛り上がりも期待できないと思います。	ふれあいセミナーでの意見交換により地域住民の皆様が関心をもたれるようになることが一つの目的です。より効果的な会の開催のために検討したいと思います。
外来種対策について	川本来の生態系を維持することは困難な状況にある。外来種の除去にも限度があり、生物の生活史を明らかにして、在来種の昆虫類で除去させる研究を進め、 在来種の河川にして欲しい 。	外来種の駆除については、生物の多様性の確保の観点から、外来種への適切な対応が必要と考えています。地域の皆様の協力をいただきながら対応を考えていきます。